

第4章 プロジェクト評価

—活動と成果の関係を考察—

事業計画の立案と成果評価

がん政策情報センタープロジェクトは、米
国ジョーンズ・ホプキンス大学ブルームバーグ
スクールによって事業計画と成果評価に関す
る指導を受けてきました。がん対策の問題点
は何か、何を達成すればよいか（目標設定）、
目標達成度合いを何の尺度で測るか、達成す
るための道筋（ロジック）を明確化する、な
どの視点です。

プロジェクトのミッションとアウトカム目
標は4ページの通りです。スタッフは、自身
の活動が「ミッションに沿っているか」「目
標達成のためになっているか」を常に自問自
答するよう心がけていました。また個々の活
動自体にも数値目標を設け、結果が目標に到
達したかをスタッフ全員で確認する体制をと
ってプロジェクトを進めていました。

プロジェクト評価委員会による評価

外部委員主体の「プロジェクト評価委員会」
を設置し、目標設定の妥当性、活動の進捗状
況、社会への貢献意義などに関して、評価と
指導を受けています。1年ごとに評価会議を
開催しています。

参加者による評価

当センターのメーリングリストやがん政策
サミットに参加した患者アドボケートのみな
さんから「がん政策情報センターの活動」に
対するフィードバックをいただいています。

また、「アドボカシー活動に関する自己意
識」もいただいています。さらに、がん政策
サミットの参加者の方々からも評価を聞いて
います。

参加者による評価（抜粋）

- がん政策サミット2011参加者アンケートから
 - ・がん政策サミットのような場が必要である 57人／57人中、今後も参加したい 55人／57人中
- がん政策情報センターの活動に関するアンケートから
 - ・活動が有益だと思った方：メーリングリスト33人／50人中、「がん政策レター」31人／50人中
 - ・アドボカシー活動に関する自己意識について

	アドボカシー活動への興味・関心		自身のアドボカシー活動の実施について		自身のアドボカシー活動の成果について	
	とてもあった	あった	活発に行った	行った	大いに成果が出た	成果が出た
2008年	23	14	16	13	6	10
2009年	29	16	20	13	7	19
2010年	35	11	24	14	12	17

※各設問とも選択肢4段階で回答していただいた結果 (n=50)

プロジェクト評価委員会の概要

- 2009年評価委員会：2010年2月19日開催
2010年評価委員会：2011年2月7日開催
2011年評価委員会：2012年2月開催予定

●評価委員会メンバー *敬称略

曾根 泰教（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授）〔委員長〕

立森 久照（独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部統計解析研究室長）

宮田 裕章（東京大学大学院医学系研究科医療品質評価学講座特任准教授）

渋澤 健（シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役／日本医療政策機構副代表理事）

大 毅（大毅法律事務所弁護士／日本医療政策機構監事）

廣井 良典（千葉大学法経学部総合政策学科教授／日本医療政策機構理事）

●評価委員からのコメント（抜粋。詳細はウェブサイトに掲載している評価委員会報告書をご覧ください）

- ・ 情報提供は、単に提供にとどまらず、提供した情報に対する患者さんのフィードバックを集めると有益な情報の裏付けを確認できる。
- ・ アドボカシー支援活動に関して、緩和医療や終末期医療のように、医療機関の対応がまだ十分に浸透していない部分への支援が重要だ。
- ・ 同センターがファシリテーターとして議論のプロセスデザインと場の提供に努め、患者アドボケートが議題を決めて議論を進め、それが具体的な政策提言につながるように支援することが必要だ。また、その政策提言の成果をモニターするのも重要だ。
- ・ 現在のアドボケートリーダーシップ育成型プログラムの次の展開として、より幅広い患者層へのサービスの提供を検討する必要がある。
- ・ プロジェクト運営に関して、目標設定や達成のための活動目標を明確にしているのは素晴らしい。きわめて実践的な行動をしながら、根本的な言葉の定義（好事例とは、など）や、運営のあり方などにも活発な議論を行っていることを評価する。
- ・ 単なる提言とPR活動を超えて、実際に政策の法案（条例）化を目指し、実現までを視野に入れているのが特徴だ。また、プロジェクトのアウトカムとアウトプットを明確にし（時期も短期、中長期と区別）、さらに、その目標を絶えずチェックするフィードバック体制ができているのは評価できる。
- ・ 成果を出すには、協働する患者アドボケートとの良好な関係は必要不可欠である。それには、患者アドボケートと当センターが、互いに学び合い、また、この活動への参加により、何らかの社会的なよいサイクルの一部に貢献できている実感を持てることが重要だ。
- ・ 同センターの活動領域だけを見るのではなく、この活動をひとつのパーツとして、がん対策全体での視野を持たねばならない。